

イタリア・サルデーニャの民俗服飾にみる美の記憶

—— ルオーロ博物館の民俗衣装から ——

A Study of Sardegna's Traditional Costume

泉 山 幸 代

Sachiyo IZUMIYAMA

I はじめに

イタリア本土の西に位置するサルデーニャ島はシチリアに次ぐ地中海第2の大きさの島で、四国とほぼ同じ面積をもち、一つの州（サルデーニャ県）を形成している。州都カリアリから車で2時間、島のほぼ中央部にヌオーロという町がある（図1）。町を見下ろす小高い丘に、サルデーニャ各地方の生活民具と民俗衣装を展示しているサルデーニャ生活・民俗伝統博物館（Museo d.Vita e d.tradiz.popol.sarde）が建てられ、イタリア本土とは異なる島独特の祭りや、工芸を伝承している。この島は古代から5千年の悠久の歴史と、独自の文化を誇り、特に女性達の手で受け継がれてきた伝統民俗衣装の優雅で豪華な美しさは壮観といわれている。

こんにちたくさんの美しい民俗衣装を見たいなら、大きな祭りを見学するのが一番であろう。サルデーニャ島においても5月に行われるカリアリのS.Efisia祭や、8月ヌオーロのRedentore祭での民俗衣装パレードは、さながら動く生きた衣装博物館のようだといわれている（写真1）。それは島の北部、中央部、南部によって衣装が異なるのはもとより、わずか数キロしか離れていない隣町とでも違いがあるため、集落によって微妙に差異がある衣装の数の多さが有名であること、そして歴史的背景や地理的状况から、他の文化の影響を受けて衣装が多彩であることがその理由である。

なかなかタイムリーに祭りの時期に行くこ



図1 サルデーニャ島



写真1 S.Efisia祭

とは無理としても、100点を超える伝統民俗衣装を収集している博物館は服飾研究者にとっては必見である。今回、機会を得てサルデーニャ民俗服飾の見学研修を行うことができた。

「現代の衣服には伝統的衣装のモチーフが表現されている」とよく言われ、確かに最近のパリコレクションや高名なデザイナーの作品にもその有様がうかがえる。それらに伝承の要素や真偽を見い出すことはなかなか容易ではないが、楽しみなことではある。サルデーニャの衣装から今のイタリアンファッションを読み解くヒントがあるのではないかと思う。

本報ではサルデーニャの民俗服飾の中で、特に伝統的要素の濃い民俗衣装からその特殊性の考察を試みた。

II サルデーニャの民俗服飾について

1. サルデーニャ生活・民族衣装博物館成立の背景

サルデーニャ島では、すでに19世紀末期から衣服の一般化や都市化が進み、また島以外からの衣服の導入も行われていた。そこで、1950年代にサルデーニャ自治州政府の指導のもとに博物館の建設構想が打ちだされ、この土地固有の人々の衣服や手工芸品が町村民総意のもとで収集された。1972年、ヌオーロに州立法のもと博物館が設立され、1976年8月に一般公開された。1970年代以降も活発な収集活動を展開し現在、民俗衣装や織物、装身具の展示室のほか、宗教的慣例（仮面や護符）、食生活（パン・菓子）、音楽（楽器等）、生活用具（椅子・寝台・棚）などの伝統文化を15の展示室に分けて公開している。

展示されている衣装は特に女性の婚礼衣装が多い。現在の生活ではほとんど民俗衣装を着なくなつたため、100年前よりも、さらにもっと以前の衣装が良い状態で保存、展示されている。

サルデーニャの人々にとって、収集は忘れられた日常の品々の再創造と自分の村のルーツを再探求することなのかもしれない。

2. 民俗衣装の特徴

「島の文化」はともすればその伝統というものをそっくりそのまま保存しようという傾向が強いであろう。この事実はサルデーニャ島でも極めて明らかである。それは島の生活が漁業、農耕、牧畜に従事していること、ヌオーロのように島の内陸は今なお深く森林が生い茂り、標高2000m級の険しい山々が続き、そのため互いに独立した小地域が出来上がったことからである。それゆえ村（町）独自の方言があり、言語の保存は伝統への属性を是認しているようにもみえる。「伝統民俗衣装」についても同様に、何世紀もの間変わらない社会の中で発展してきた習慣の結果である。

男性の民族衣装は金銀ボタンのついた白のシャツの上に毛や革の黒いベスト、白いズボン、短い黒のスカートにベリッタと呼ばれる帽子を被るのが伝統的である。スペインが起源の慣習である長い髭を生やすのがステータスという。一方女性の衣装は、小さなプリーツやレースがつきさらに刺繍で飾られたブラウスにベスト、スカートは黒や赤の濃い色でひだ飾りがつけら

れ、足首までの長さである。必ず着用するエプロンは刺繍やレースの装飾が付けられ、模様は地方の特徴を現している。スカーフまたはショールを被り物として用いるが、これもスペインから伝えられたといわれている。このようにサルデーニャの衣装にはイタリア本土よりも、スペインからの影響が見受けられる（写真2）。

○ブラウス

民俗衣装のブラウスについて、文献は「エーゲ文明時代（前20～13C）の昔のクレタがルーツ（源）であることは確かである。」と記している。クレタの斬新な美的要素が時を重ねて伝えられているのであろうか。事実考古学者たちはクレタで大きなブラウスを着て胸を露にしている女性像をいくつも発見している。サルデーニャのブラウスに見られる胸を強調するデザイン（ピントック、ギャザーなどの縫製技法）や、胸を引き立たせるような小さなベスト、後述するが乳房形とも思えるボタンに、女性を象徴するサルデーニャの豊穣を示す宗教的儀式（*madreme diterranea* 地母神信仰 地母神は大地の実り・豊穣をつかさどる女神）を推測することができる（写真3）。

○スカーフ（ヴェール・ショール）とエプロン

古来から被り物の本質的役割は太陽、寒さ、雨、風から髪と頭を保護することであると同時に、女性の貞節を守るために肌や髪を覆って見せないことであった。現代においてもアクセサリとして用いるほか、宗教的儀式に用いるなど、礼儀と謙虚の証でもある。

サルデーニャ民俗衣装のヘッドスカーフは、これもスペイン文化として伝わったものといわれているが、様々な形のスカーフは模様や色彩にその地方の特徴を見ることができる。「*pala asupra*」というヌオーロの花嫁衣装の頭飾りは、木綿のバンド状の布の片方を頭に巻きつけ、もう一方の端を肩の上に垂らしている（写真2）。「*Oliena*」の女性用祭事衣装のショールは金色のと多色染めの絹糸で花の刺繍をしたドレスに合う、マクラメ編みの黒い絹のフリンジで縁取った黒いチベットウール製ある（写真6）。「*Desulo*」のスカーフの目立った特徴はリバーシブル仕立てのため、自分が見せたいイメージによってどちらかの面を表にして着用すること

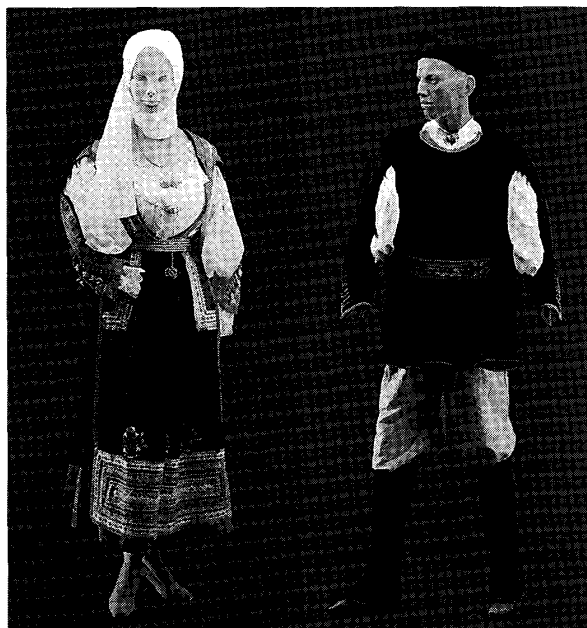


写真2 Nuoroの民族衣装

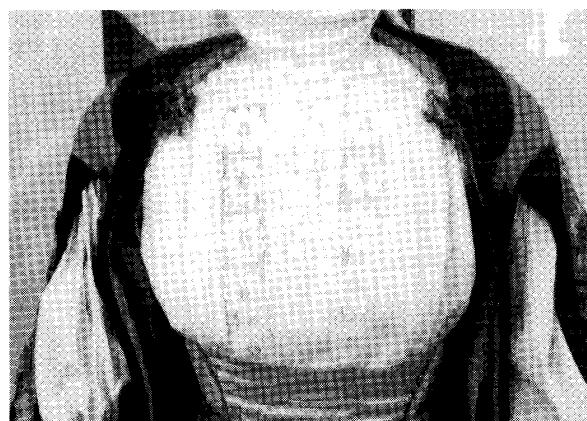


写真3ブラウス

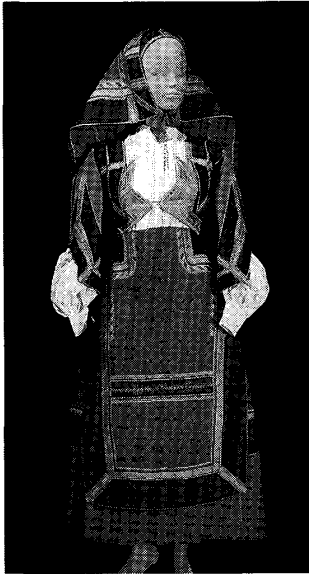


写真4 Desuloの衣装



写真5 Atzaraの衣装



写真6 Aritzoの衣装

ができる（写真4）。幾何学的ラインと赤青のコントラストは、着装の面白さと共に斬新である。また「Alzara」の花嫁衣装のヴェールも短い丈であるがその形が興味深い頭飾りである（写真5）。

サルデーニャの衣装にみられるエプロンの伝統的要素について、「Aritzo」の祭りの衣装で、下側のラインが丸くなったオレンジ色の絹ベルベットのエプロンの形は特に珍しい（写真6）。脇から前腰に沿ってカーブし裾の丸みへと流れる線は、クレタの女神像のエプロンを連想させるようである。「Desulo」や「Atzara」のエプロンは角形で幅の太い縁飾り布や横線飾りが特徴である。「Monserrato」のエプロンの美しさはサルデーニャの衣装の中で最高傑作



写真7 Monserratoのエプロン

と言われている（写真7）。エプロンの形は短く横幅の広い角形で、真ん中に細かいプリーツがとられ、その上の胴部になる位置に赤のベルベット地がみえる。他の黄色い菊の花の模様を織りだしたダマスクの金色との配色や、同じ金色のレースの幅広コードが裾や縫目に装飾的に付けられて素材とともにより一層の華やかさである。

このようにエプロンは他の西欧諸国の民俗衣装と同様に、実用的に用いられるのではなく、儀式や祭りの慣習、習俗としての役割をあらためて認識されるのである。

さらにこの豪華なエプロンドレスは17世紀末の西欧ファッションを連想させる。当時エプロンは世紀末から18世紀にかけて貴族・富裕階級の女子服の盛装に欠かせないものであった。下衣を隠すほどではない短丈で、布は絹製やブロード、刺繍やレース入の全く実用性のない装飾的なものである。13世紀以来、サルデーニャはスペイン支配下であり17世紀のイタリアはま

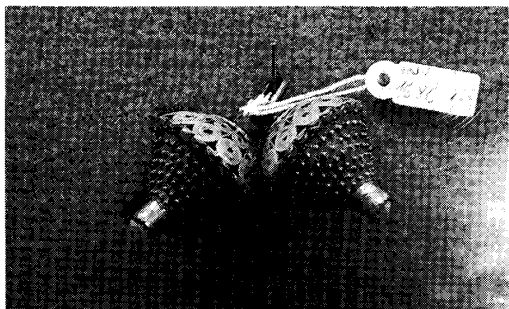


写真8 ボタン



写真9 ボタン

だスペインの影響を受けていた。このことから民俗衣装の伝承が歴史的背景の中で勢力優位者との間で、なんらかの影響関係があったことを見事に示しているといえよう。

○装飾品（特にボタン）

サルデーニャの民俗衣装を飾る伝統的な宝飾品は首飾り、耳飾、ブローチ、腕輪、指輪、護符、そして民俗服に付けられているボタンやバックル等で、金銀細工の技術はレベルが高いと世界中で評価されている。「手で一つ一つ丁寧に作られるこれらのアクセサリは、サルデーニャ女性の虚栄と優美に敬意を表す古代のデザインによる」と博物館資料に記されているデザインは、サルデーニャの歴史からみると有史以前まで遡るが、古代ローマ、ビザンチンの影響を受けていると考えられる。意匠と様式は渦巻き模様のように先史時代にルーツを持つものもあり、特にサルデーニャの衣装を特徴づける襟元のボタンもその一つである。

「民俗服の男女のブラウスを閉めるのに使われる二つのボタンは多産の象徴で、フェニキアの女神タニットの胸を表している」と興味深い記述がある（写真8，9）。図録によるとボタンは「pomegranate 柘榴」を模したものであると記されていた。柘榴は実が多いことから多産や子孫繁栄の象徴としてよく用いられている。サルデーニャの衣装の柘榴形ボタンは襟元、胸元に一対（2個）として付けられ、女性ばかりではなく結婚式の花婿の胸を麗々しく飾っている（写真10）。

このボタンを違う角度から見ると乳房形にも思える。それは一対であること、柘榴が豊穡、多産を意味する共通の概念であること、胸を強調するブラウスやベストに付けられていることであるが、確かな手掛かりはなく、見る者の多くがなぜかそのように思うのである。

身を飾る宝飾はつねに母から娘へと、その家の精神を伝えるために受け継がれていったという。

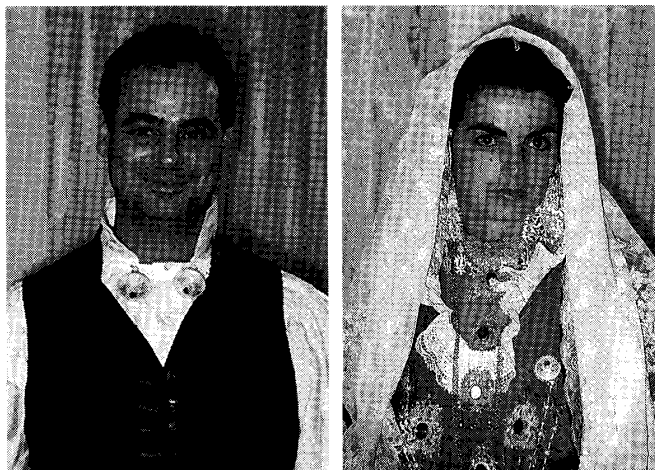


写真10 サルデーニャの民族衣装

Ⅲ お わ り に

八月に訪れたサルデーニャ島は白く輝く白浜に、エメラルド色の海を持つ美しき別天地だった。しかし内陸部のヌオーロに向かう車窓は険しい山々が続き、羊がひっそりと草を食む光景が写り、かつて「陰の国」と呼ばれたという意味も伝わってくる。ヌオーロの年輩の女性の多くが、未だ常時黒い服を身につけることもその現われであろうか。

サルデーニャの歴史をみると多くの異民族に侵入されながらも、この島を完全に支配し制圧した支配者はいない。異民族に屈しないことではイタリアでもっとも強い人々、いつもの明るいイタリア人とは違う、サルデーニャ人としてのもう一つの顔である。

その島に伝わる伝統民俗衣装は悠久の文化とともにいまでも生活の中でしっかりと息づいている。僅か数日の研修であったが、サルデーニャのひとびとの不屈な精神を垣間見ることができた。

付記

本研究は北海道浅井学園大学特別研究費の助成を受けて実施したものである。

参 考 文 献

The Ethnographical Museum Nuoro Paolo Piquereddu, 1998

国際服飾学会会報第41号, 2004.3

服部照子 民族服のアクセサリ― スカーフとエプロン, 装苑アイ9号, 1992